視察研修報告書

ふくやまベトナムの会　卜部 ユン

日時：2012年6月28日
場所：岐阜県可児市多文化共生センター（愛称：フレビア）

【はじめに】

可児市は、岐阜県の中南部（愛知県との県境）に位置する人口約10万人の小都市です。

岐阜市や名古屋市までの距離が30km程度（電車で約1時間）なので、これらの都市のベッドタウンとして発展してきたそうです。

特に愛知工業地帯の影響で自動車部品の工場が多く、そのため外国人労働者の数も非常に多いことが、とても印象的でした。

実際、外国人登録者をしている人の数は、全人口の約5.7%に及ぶそうです。この比率でさえ驚異的ですが、景気が落ち込む前のピーク時には、なんと10%近くの外国人がくらしていたそうです。ちなみに、昨年度の福山市で約1.3%です。

このような実態にあわせ、可児市では他都市に比べると比較的早い時期から外国人への支援事業が盛んにおこなわれていたということで、数ある取り組みの中から、今回は「可児市多文化共生センター（愛称：フレビア）」を視察させていただきました。

【活動内容】

「可児市多文化共生センター（以後フレビアと記す）」は、可児市が１億2700万円をかけて造りました。運営は「NPO法人可児市国際交流協会」が任されています。

このフレビアで実際におこなわれている活動ですが、可児市にくらす外国人の生活を保障するために、日本語教室、就職支援、教育支援、生活相談、交流活動、支援者育成などが中心になっています。

日本語教室は、多種多様な人たちが受講できるように、昼間、夜間、大人向け、子ども向け、入門編、日常会話編など、様々な形式のものが用意されていて、より多くの外国人が言葉の壁を乗り越えられるよう、きめ細かい取り組みをしているそうです。

就職支援では、ヘルパー2級やフォークリフトの資格取得に向けた講座や研修を開催し、生活基盤の安定を目指した取り組みも実施しているということでした。

生活相談でも、一般的な相談業務や情報提供のほかに、地域に根ざしたくらしができるようにということで、資源回収への参加や、防災意識向上のための劇などもおこなわれています。

また、子どもたちのための教育支援活動にも力を入れていて、私はこのような活動を体感したことがなかったので、とても印象的でした。

元々、市内でくらす外国人の割合が多い可児市ではありますが、学校ではそれがさらに顕著になるようで、全校児童数・生徒数の約10%が外国籍の子どもだと聞き、非常に驚きました。そのため、フレビアでは、就学前準備活動、就学支援、進学支援について、それぞれの取り組みに力を入れています。

視察時に、フレビアでブラジル籍とフィリピン籍の子どもたちが一緒に楽しそうに勉強している姿を見て、とてもうらやましく思いました。
自身が外国人である、あるいは両親のどちらかが外国人であるというような同じタイプのアイデンティティを持つ子どもたちは、直接、そのことを宣言し合わなくても感覚的に何か肌で感じるものがあるのでしょうか、ここにいる子どもたちの表情は母に守られている幼子のように穏やかでした。外国籍の子どもたちにとって、自分たちの居場所が保証され、集う場所があるということが、とても心強く、そして安心につながっているのだと思いました。

このような取り組みを推進している可児市にも、課題はあります。多文化共生の地域づくりの一環として開催している「多文化共生フェステイバル」という行事があるのですが、外国人の参加者数に比べて日本人の参加者数が非常に少ないということです。
これは、多文化共生にとりくんでいるほとんどの地域でぶつかる壁だと思いますが、フレビアにおいても例外ではなく、今後は地域住民に対して多文化共生の輪を広げていく取り組みにも知恵と力を注ぎたいとおっしゃられていました。

【まとめ】
フレビアでとりくんでいる教育や就職などの支援活動や、各種交流行事など、全てに共通するねらいは「地域に根ざしてくらす」ことにあります。そのための教育であり、仕事であり、環境づくりであり、交流行事であるという考え方に共感を覚えました。
これからの社会において外国人はもはや「お客さん」ではありません。「いずれ帰国するだろう」といった姿勢をどこかに含んだ一時的な生活支援や交流活動では意味をなさない時代が、既に到来しているのです。こういった時代の変化をいち早く捉えた可児市の取り組みは、素晴らしいと感じました。

人口比率では可児市に及ばないものの、福山市の外国人登録者数は既に可児市を超えているのです。ですから、福山市においても、新しい時代の国際化や多文化共生の取り組みを推進していくためには、この「可児市多文化共生センター（フレビア）」のような存在が必要不可欠だと思います。

私たち外国人は、言葉の壁や文化の壁に閉じこもって、勝手気ままにくらしているわけではありません。「いずれ帰るから」という安易な思いで生活しているわけでもありません。
私たちも地域でくらす生活者です。しかし、現在、地域に根ざしてくらすための様々な相談や交流、また支援について、どこに情報があるのか、どこに聞いらいいのかさえわからない状況があります。もし、フレビアのような存在が福山市にもあれば、「あそこに行けばなんとかなる」という思いで外国人が多数訪れることでしょう。そうすれば、様々な支援活動も、必要としている人に適切に注がれていくことになり、より効果的に事業が推進していくと思います。
また、これによって、私たち外国人がくらしやすくなるだけではなく、共にくらす市民のみなさまとのつながりも深まっていきますから、様々な地域活動も活性化されていきます。まさに多文化共生のまちづくりの目指すべき姿ではないでしょうか。
ぜひとも、福山市にも多文化共生の拠点を設置していただきたいという願いを、市への要望として挙げさせていただき、本報告書の終わりとさせていただきます。